

『わたしに向き合う方の声』 ヨハネ21:18-22

21:18 よくよくあなたに言うておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」。

21:19 これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こう話してから、「わたしに従ってきなさい」と言われた。

21:20 ペテロはふり返ると、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのを見た。この弟子は、あの夕食のときイエスの胸近くに寄りかかって、「主よ、あなたを裏切る者は、だれなのですか」と尋ねた人である。

21:21 ペテロはこの弟子を見て、イエスに言った、「主よ、この人はどうなのですか」。

21:22 イエスは彼に言われた、「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」。

●序論

…ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい。 (:17)

彼にとって、イエスさまを愛することの思いはある。それと同時に自分の不十分さ、足りなさを、イエスさまにすべて知っていただいていることの方が大切であったのです。

「主よ、あなたはすべてをご存じです」と。

わたしたちの信仰の歩みは、いつでもこの告白から始められます。ここから再出発もできるのです。

●本論

I. よくよくあなたに言うておく

すべてをご存じのイエスさまが、ペテロに告げたのは、彼が将来迎える死にざまでした。

21:18-19 よくよくあなたに言うておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」。これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。…

「よくよくあなたに言うておく」という表現は、このヨハネによる福音書に特徴的な、イエスさまの表現で「まことにまことに」「はっきり言うておく」などと別訳ではなっています。数えてみると25回使われ、今日の18節が、その最後になります。

今日のイエスさまのお言葉は、ペテロの耳にどんなふうに聞こえたでしょうか？
またそれをどう受け止めたのでしょうか？

ただここでも、ペテロ自身の告白が、響くのです。「あなたはすべてをご存じです」と。

このことは必ず成る…と、心に打ち込まれたことでしょう。

これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。…(:19)

ヨハネの解説の言葉です。この福音書がつづられたとき、すでにペテロは殉教の死を遂げてからしばらくの時が経っていました。

彼は、イエス・キリストを愛する証しをもって、逆さ十字架で死に至ったという伝承です。キリストを愛する彼の大胆な死にざまが、キリストの真実を証明し、一層、御国に希望を置く人々の信仰を強めたということでしょう。

渡辺和子さん著「置かれた場所で咲きなさい」…

彼女がいただいた詩を読んで教えられたことです。ペテロに重ねて聞いてください。

「咲くということは、仕方がないと諦めるのではなく、笑顔で生き、周囲の人々も幸せにすることなのです」と続いた詩は、「置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです」と告げるものでした。

置かれたところで自分らしく生きていれば、必ず「見守ってくださる方がいる」という安心感が、波立つ心を鎮めてくれるのです。

そしてこうもありました。

「咲くということは、仕方がないと諦めることではありません。それは自分が笑顔で幸せに生き、周囲の人々も幸せにすることによって、神が、あなたをここにお植えになったのは間違いでなかったと、証明することなのです」

すべてをご存じであるイエスさまに信頼すること、そばにいて見守ってくださることで安心すること。そしてたとえその「殉教の死」の場所でも、「神があなたをここにお植えになったのは間違いでなかったと証明できること。

それが「ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになった」ことの真意ではないでしょうか。

Ⅱ. 振り返ると奴がいる

「振り返れば奴がいる」という昔ヒットした医療系ドラマがありました。

そこには、振り返ると、競い合うライバルの存在があるというようなことであつたかと思います。

さて、イエスさまと向き合っていたペテロが、ここで、ふっとイエスさまから目を離れた瞬間がありました。そこにペテロにとっての「奴」がいた…のです。

21:20 ペテロはふり返ると、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのを見た。この弟子は、あの夕食のときイエスの胸近くに寄りかかって、「主よ、あなたを裏切る者は、だれなのですか」と尋ねた人である。

21:21 ペテロはこの弟子を見て、イエスに言った、「主よ、この人はどうなのですか」。

「イエスに愛されていた弟子」。それはこの福音書の記者ヨハネでしょう。

ペテロが振り返って見かけ、気になったのはヨハネはどうなるんだろう？ということです。それは、自分と比べて彼の運命はどうなる？という比較や好奇心からの問いかけであったのでしょう。それと同時に、この人は大丈夫だろうか？という心配の思いもあったかもしれません。

その思いを「すべてご存じのイエスさま」のお答えは明快でした。

21:22 イエスは彼に言われた、「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」。

不思議ですよ。わたしたちはどうしても誰かと比較したくなる。振り返って誰かを見つけて「この人はどうなの？」と知りたくなるのです。

でもイエスさまは、わたしたちの視線をイエスさまに定めること、そして「わたしに従ってきなさい」と告げるのです。

Ⅲ. あなたは、わたしに従ってきなさい

ここでは二度、語られています。

21:19 これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こう話してから、「わたしに従ってきなさい」と言われた。

21:22 イエスは彼に言われた、「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」。

ほかのだれかではなく、「あなたは、わたしに従ってきなさい」と言われます。

わたしの歩みと、だれかの歩みは、働きも賜物は違うのです。

それからイエスは弟子たちに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。…」

(マタイ16:24)

わたしたちには自分の背負うべき十字架があり、それを負うて”イエスさまに従う”のです。それがまた、「わたしを愛するか」と問われたイエスさまからの言葉です。

今日、ペテロはその御声を聞いて、そこから使徒としての歩みを回復していきました。ここで、彼がのちに人々にどんなふうに語っているか、少し紹介しましょう。

1 ペテロ4:12-16

4:12 愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。

4:13 むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。

4:16 しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神をあがめなさい。この将来をイエスさまが見てくださったのです。事実彼は、その証を立てています。

使徒パウロも、こういう風に自分の歩みを語ります。

4:6-8 …世を去る時が近づきました。わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです。

大切なことは、今という時にしっかりイエスさまと向き合い、その声を聞いたならば、自分のいただいた十字架をしっかり負ってイエスさまについてゆくことです。それが従う、ということであり、わたしたちの成長につながるのです。

さいごに)

21:19 これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こう話してから、「わたしに従ってきなさい」と言われた。

最近、わたしは若い先生方と一緒にお仕事をする機会も増えて、自分がこの中で一番年上だ…という事ばかりとなっています。ただ比べていても仕方ありません。

そんな中で、今わたしに目を向けてくださっている、語ってくださっているイエスさまに、改めて目を向けるように心がけているのです。当たり前のことですね。

それは、これからいかなる生き方、そして死に方を迎えようと「神の栄光をあらわすため」です。

先ほど紹介した「置かれた場所で咲きなさい」の中で、こういう言葉がありました。

(経験する) 多くのことを胸に納め、花束にして神に捧げるためには、その材料が必要です。ですから、その境遇で与えられる物事の一つひとつを(困難や問題をも)、ありがたく両手でいただき、自分しか作れない花束にして、笑顔で、神に捧げたいと思っています。

この、自分が置かれたところで、自分にしか作れない花束こそ、神の栄光をあらわすものだと、わたしは教えられているのです。